

地球電磁気・地球惑星圏学会

SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,
PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

<http://www.kurasc.kyoto-u.ac.jp/sgepps/>

第163号 会 報 1998年 11月 25日

目 次

第20期学会役員選挙広報	1	第197回運営委員会報告	7
第20期役員立候補者・辞退者一覧	2	学会連合について	8
歴代役員一覧	3	EPS 運営委員会報告	9
参考資料（選挙関連規約および内規抜粋）	3	大林奨励賞を受賞して	10
第104回総会・講演会報告	4	太田征次郎名誉会員の逝去を悼む	12
第104回総会式次第	4	平成10年度大林奨励賞候補者推薦のお願い	13
学会風景	5	人事公募	13
1999年合同大会の日程	5	共同利用研究公募	14
会長挨拶	6	次期月探査シンポジウム開催のご案内	15
大林奨励賞審査報告	6	SGEPSS Calendar	16

第20期学会役員選挙広報

第20期（1999-2000年度）地球電磁気・地球惑星圏学会役員選挙を下記の通り施行いたします。投票に当たっては本会報中の学会規約、および内規の抜粋、現役員名を含む過去8期間の歴代役員一覧、および添付の本学会正会員の名簿をご覧ください。本学会役員選挙内規に基づき評議員および運営委員として立候補された方々は後記役員立候補者一覧の通りです。前回同様、会長1名と評議員9名、運営委員14名の連記による投票となります。被選挙権は立候補者だけでなく正会員全員にありますので、立候補者名簿を参考に、会員名簿を参照の上、地域、分野、機関等のバランスに配慮した、新規役員の選出をお願い致します。

記

投票要項：会長および評議員候補者はピンク色の投票用紙に、運営委員候補者名は緑色の投票用紙に記入し、2種の投票用紙を共に同封の小封筒に入れ、返信用封筒を用いて郵送して下さい（切手の貼付は不要です）。

投票締切：1998年12月25日受取分まで

郵 送 先：〒113-8622

東京都文京区本駒込5丁目16番9号
学会センターC21

(財)日本学会事務センター内

地球電磁気・地球惑星圏学会 宛

第20期 役員立候補者・辞退者一覧

氏名	年齢	所属	研究分野	推薦者
評議員立候補者				
江尻 全機	56	国立極地研究所 資料主幹	オーロラ・磁気圏物理学	平沢 威男 松本 紘
上出 洋介	54	名古屋大学 太陽地球環境研究所	太陽地球系物理学	西田 篤弘 国分 征
福西 浩	55	東北大学大学院 理学研究科	地球および惑星の電磁圏と 超高層大気	藤井 良一 湯元 清文
運営委員立候補者				
麻生 武彦	54	国立極地研究所	レーダーエアロノミー・ 超高層物理学	平沢 威男 松本 紘
家森 俊彦	46	京都大学大学院理学研付属 地磁気世界資料解析センター	地球・惑星磁気圏	河野 長 岩上 直幹
井口 博夫	46	姫路工業大学 環境人間学部	古地磁気・岩石磁気	乙藤洋一郎 伊勢崎修弘
糸長 雅弘	45	山口大学教育学部 数理情報教室	磁気圏物理学・U L F 波動	湯元 清文 田中 高史
岩上 直幹	48	東京大学大学院 理学系研究科	大気化学物理	林 幹治 寺沢 敏夫
歌田 久司	45	東京大学地震研究所	地球内部電磁気学	笹井 洋一 大志万直人
大村 善治	41	京都大学 超高層電波研究センター	宇宙プラズマ物理学	河野 長 松本 紘
小野 高幸	48	東北大学大学院 理学研究科	惑星プラズマ物理学	大家 寛 森岡 昭
品川 裕之	44	名古屋大学 太陽地球環境研究所	地球惑星超高層大気物理学	小川 忠彦 上出 洋介
田中 良和	59	京都大学 理学部 火山研究センター	地球内部電磁気学	河野 長 岩上 直幹
津田 敏隆	46	京都大学 超高層電波研究センター	大気物理学、地球大気計測	河野 長 岩上 直幹
綱川 秀夫	44	東京工業大学理学部	古地磁気学、月惑星磁場探査	鳥居 雅之 早川 基
早川 基	43	宇宙科学研究所 太陽系プラズマ研究系	地球・惑星磁気圏	河野 長 岩上 直幹
星野 真弘	40	宇宙科学研究所	地球・惑星磁気圏	河野 長 岩上 直幹
三宅 互	38	通信総合研究所 宇宙科学部	地球・惑星磁気圏	河野 長 岩上 直幹
山崎 俊嗣	39	地質調査所海洋地質部	古地磁気、岩石磁気、 磁気異常	河野 長 鳥居 雅之
渡邊 堯	57	茨城大学理学部	太陽、惑星間空間	河野 長 岩上 直幹
運営委員辞退者 (学会内規第2条第3項による)				
湯元 清文		九州大学理学部		

歴代役員一覧

第12期 1983-1984	第13期 1985-1986	第14期 1987-1988	第15期 1989-1990	第16期 1991-1992	第17期 1993-1994	第18期 1995-1996	第19期 1997-1998
会長							
小口 高	小嶋 稔	木村磐根	行武 毅	西田篤弘	大家 寛	國分 征	河野 長
評議員							
大林辰蔵	大林辰蔵	大家 寛	大家 寛	大家 寛	小嶋 稔	大家 寛	荒木 徹
小嶋 稔	大家 寛	小嶋 稔	小嶋 稔	小嶋 稔	恩藤忠典	小嶋 稔	大家 寛
加藤 進	小口 高	加藤 進	恩藤忠典	恩藤忠典	河野 長	木村磐根	小川利紘
上山 弘	加藤 進	杉浦正久	加藤 進	加藤 進	國分 征	河野 長	木村磐根
平尾邦雄	上山 弘	中沢 清	木村磐根	木村磐根	木村磐根	鶴田浩一郎	國分 征
広野求和	西田篤弘	西田篤弘	西田篤弘	河野 長	西田篤弘	西田篤弘	鶴田浩一郎
福島 直	平尾邦雄	松浦延夫	平澤威男	平澤威男	平澤威男	平澤威男	西田篤弘
前田 坦	福島 直	安川克己	広岡公夫	広岡公夫	松浦延夫	松浦延夫	本蔵義守
行武 毅	行武 毅	行武 毅	森 寛	安川克己	山越和雄	松本 紘	松本 紘
力武常次	力武常次	若井 登	安川克己	行武 毅	行武 毅	行武 毅	行武 毅
運営委員							
飯島 健	荒木 徹	乙藤洋一郎	乙藤洋一郎	小川忠彦	大志万直人	大志万直人	家森俊彦
大家 寛	飯島 健	河野 長	小山孝一郎	乙藤洋一郎	乙藤洋一郎	大村善治	岩上直幹
小川利紘	伊勢崎修弘	近藤 豊	近藤 豊	佐藤夏雄	小島正宜	小野高幸	大村善治
恩藤忠典	河野 長	住友則彦	佐藤夏雄	寺沢敏夫	渋谷秀敏	笹井洋一	小野高幸
國分 征	國分 征	田中義人	寺沢敏夫	鳥居雅之	田中高史	佐藤夏雄	笹井洋一
佐藤哲也	住友則彦	鶴田浩一郎	鳥居雅之	長野 勇	寺沢敏夫	渋谷秀敏	高橋主衛
住友則彦	鶴田浩一郎	鳥居雅之	西田泰典	西谷忠師	鳥居雅之	田中高史	田中良和
鶴田浩一郎	新妻信明	深尾昌一郎	西谷忠師	浜野洋三	浜野洋三	早川 基	津田敏隆
広岡公夫	浜野洋三	福西 浩	浜野洋三	林 幹治	兵頭政幸	兵頭政幸	早川 基
福西 浩	広岡公夫	本蔵義守	林 幹治	深尾昌一郎	深尾昌一郎	三浦 彰	星野真弘
本蔵義守	福西 浩	松本 紘	深尾昌一郎	福西 浩	三浦 彰	森岡 昭	三宅 互
松本 紘	本蔵義守	向井利典	福西 浩	本蔵義守	森岡 昭	山本達人	湯元清文
丸橋克英	松本 紘	柳澤正久	本蔵義守	前沢 洌	山本達人	湯元清文	横山由紀子
安川克己	丸橋克英	山越和雄	丸橋克英	町田 忍	湯元清文	横山由紀子	渡邊 堯

＜＜参考資料＞＞選挙関連規約および内規抜粋

地球電磁気・地球惑星圏学会規約

第3章 役員

第8条 本会に次の役員を置く。

会長1名、評議員10名、運営委員14名。
ただし、同一人が2つ以上の役員を兼ねることはできない。

第9条 会長、評議員、運営委員は内規の定めるところに従って正会員の互選によって決める。ただし、会長は無投票で次期評議員となる。

第10条 会長は本会を代表し会務を総括する。ただし会長に事故のある時は内規の定めるところに従って会長代理を置く。

第11条 評議員は評議員会を構成し、第20条に定める会務を行なう。

第12条 運営委員は運営委員会を構成し、第21条に定める会務を行なう。

第13条 役員は任期は2年とする。会長は重任することはできない。役員に欠員を生じた時は、内規で定める次点者で補い、補欠役員

の任期は前任者の残任期間とする。役員はその任期満了後でも後任者が就任するまでその職務を行なう。

第14条 本会の事務を処理するため会員多数の研究機関には連絡員を置くことができる。連絡員は会員の中から会長が本人の承諾を得て委嘱する。

地球電磁気・地球惑星圏学会内規

第2条 役員の見学は次の通りとする。

1. 会長の選出は単記無記名投票で行なう。ただし最高得票者が2名以上ある場合には最年長者が会長に就任する。
2. 評議員の選出は9名連記無記名投票を行ない、得票数の順位に従って上位9名を当選者とする。なお得票同数者がある場合には年長者を当選者とする。
3. 運営委員については下記の様式にしたがい14名連記無記名投票を行い、合計得票数の順位に従って上位14名を選出する。なお得票同数者がある場合には年長者を当選者とする。

主として地球外部物理学を研究するもの3名

主として地球内部物理学を研究するもの	3名
東北・北海道地区に在住するもの	1名
関東地区に在住するもの	4名
中部地区に在住するもの	1名
関西以西地区に在住するもの	2名

ただし同一人を評議員と運営委員に重複して記載してもさしつかえない。なお、3期連続運営委員経験者は次期の運営委員として選ばれても辞退することができ、通算5期経験者は再任を永久に辞退することができる。これらの氏名は選挙に先立ち全会員に通知する。

4. 正会員は2名以上の他の正会員により推薦された場合、評議員または運営委員に立候補することができる。この場合学会は選挙広報に立候補者の氏名、勤務先、研究分野、推薦者名などを掲載し、投票に際しての参考資料とする。
5. 前項の選出において、もし同一人が2種以上の役員に当選した場合は、本人の意志によりその一つを選ばなければならない。
6. 前項のために定数に欠員が生じたときは、次点者を繰り上げ当選とする。

第104回総会・講演会報告

第104回総会および講演会は1998年11月10日(火)より13日(金)までの4日間、茨城大学理学部のお世話により、水戸市の茨城県青少年会館及び茨城県立歴史館で開催された。口頭発表203件、ポスター発表114件を数え、延べ411名の参加者があった。

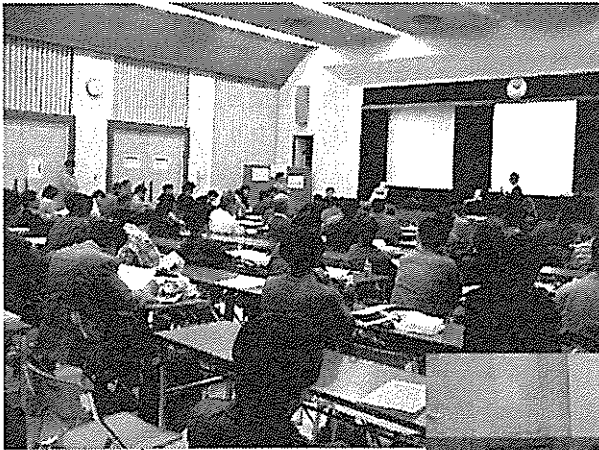
はじめに笹井運営委員を議長に選出し、渡邊大会委員長挨拶の後、大林奨励賞が橋本武志会員(第6号)と田口聡会員(第7号)に授与され、審査経過が報告された。受賞論文名はそれぞれ「自然電位観測による雲仙普賢岳直下の熱水対流の発達過程の解明」、および「北向き惑星間空間磁場のときの地球磁気圏の構造の研究」であった。運営委員会報告は岩上運営委員によってなされ、22名の新入会員が紹介された。EPS誌運営委員会からの報告が小野運営委員によってなされた後、IUGGの2003年札幌招致が地球物理学研連で決定されたことが、福西会員によって報告された。続いて、学会連合に関するアンケートに対する本学会の回答について河野会長から説明があり、それについて活発な議論が交わされた。主なものには、「重要な問題であるにもかかわらず、一般会員に対する情報伝達が不十分」、「学会連合の叩き台作りなので、この程度の検討で充分」、「2003年のIUGG対応と限ればこれで問題な

い」、などがあった。次にシニア制度に関して、66才以上を有資格者とした場合の財政負担の見積もりが、三宅運営委員より報告され、今年度の財政状況を見た上で、次年度以降に決断するとの方針が示された。次期総会・講演会は、東京代々木での合同大会中に開催。次々期は、東北大学のお世話により仙台市で開催することを承認。最後に荒木会員による謝辞で総会を終了した。

第104回総会次第

1. 議長指名 河野会長
2. 大会委員長挨拶 渡邊大会委員長
3. 会長挨拶 河野会長
4. 大林賞授与・審査報告 河野会長
5. 運営委員会報告 岩上運営委員
6. EPS誌運営委員会報告 小野運営委員
7. IUGG招致 福西会員
8. 次期、次々期開催地 湯元運営委員・大家会員
9. 学会連合 河野会長
10. シニア制度 三宅運営委員
11. 謝辞 荒木会員
12. 閉会の辞 笹井運営委員

学会風景 (撮影：会報編集局)



←A会場の講演風景

↓ポスター会場の賑わい



懇親会風景 ↓



【1999年合同大会の日程】

日 時：1999年6月8日（火）～11日（金）
場 所：国立オリンピック記念青少年総合センター
担当校：北海道大学

注意事項 アブストラクトの投稿及びプログラム編成はすべてWeb上で行う予定。プログラムとCD-ROMの予稿集を来年5月中旬に配布予定。登録料が最大1000円値上げされる可能性あり。

会長挨拶

会長 河野 長

今回は茨城大学のグループにお世話をいただき、この水戸において4日間にわたる充実した学会総会及び講演会を開くことができました。渡邊大会委員長をはじめ、本大会の運営に多大の努力をされた茨城大学の関係者の方々に感謝の意を表したいと思います。

今年は名古屋で COSPAR 総会が開催されました。昨年のスウェーデンの IAGA 総会の際にも本学会会員の活躍は顕著でしたが、COSPAR は日本における開催であり、組織委員会やプログラム委員会をはじめ、多くの本学会員が中心になって活動されて立派な会議を運営されたとうかがっています。

今後の大規模な国際学会としては来年の IUGG のバーミンガム大会がありますが、その IUGG を次の回、つまり 2003 年に日本に招致することを日本学術会議の地球物理学研究連絡委員会で正式に決定しました。現在の地球物理学の中で日本の占める重要性や、これまでに日本では IUGG が開かれていないこと等を考慮すると、この招致は国際的な責任を果たすという意味で妥当なものでしょう。しかし大会開催には大きな責任が伴います。日本学術会議は共催

団体になるだけで、主催するのはあくまでも学会が主体であり、特に開催に関わる財政面の責任はすべて学会側でとらなければなりません。現在日本の中では IUGG 傘下の各協会ごとに対応する学会があり、こうした地球物理全体にわたる事業はなかなかやりにくい環境にあります。

学会連合を強めこのような事業についても十分責任を持てる体制を作るために、各学会間の話し合いが「地球物理学関連学会長等懇談会」という形で今年春スタートしました。異なった歴史を持つ多数の学会間での話し合いですから、短期間で結論を得るといことは困難です。学会連合の実現は、これからの選挙で選ばれる次期会長および運営委員会の大きな仕事として引き継いでいくことになると思います。しかし一方で 2003 年という時限があり、ある程度急がないと実効がないことも確かです。

本日の総会ではできるだけ時間を割いて、この問題について会員のみならず皆様のご意見をうかがい、またこれまで運営委員会を中心としてとってきた方策について議論をしていただきたいと思います。

大林奨励賞審査報告

会長 河野 長

(1) 橋本 武志 会員

「自然電位観測による雲仙普賢岳直下の熱水対流の発達過程の解明」

橋本会員の研究は、1990 年秋に活動を開始した雲仙普賢岳周辺で、1991 年 2 月からの自然電位の観測によって、顕著な自然電位変化を検出し、その時間的空間的推移の原因が流動電位であるとし、火山活動に伴う地下熱水系の発達過程を明らかにしたものである。自然電位観測では埋設電極の不安定性が常に問題になるが、橋本会員は定期的に参照電極を用いて検定する方法を考案し、誤差要因をとり除いた精密な観測を実施した。

この研究では、自然電位の変化を一連の噴火活動と関連した 3 期に分けて考察した。最初のドームの出現前後に対応する 1991 年 3 月末から 6 月の第 1 期に観測された山頂部での 500 mV を超える顕著で急激な電位上昇は、深部帯水層を負、マグマ頭位を正とす

る流動電流源の急速な上昇を原因とした。1991 年 6 月から 1993 年 12 月の第 2 期には、山頂部の正電位の増大速度は鈍化したが、山腹で観測された負電位異常域の広がりから、山頂部の熱水上昇により誘起された地下水の流動が山腹部に及んだと考えている。山頂部の正電位増大速度の鈍化は、すでに熱水対流の先端が地表に達したことや、噴出溶岩がドームを形成しつつも崩落を繰り返して、火道の内圧は上昇せず熱水対流の規模は徐々にしか拡大できなかったと説明している。溶岩の噴出力が衰えて山体が膨張した時期に該当する 1994 年以降の第 3 期には、山頂部の正電位異常域が拡大したことから、熱水対流は火口の出口を塞がれ、地下浅部で横に広がったと推論した。

このように、橋本会員は長期にわたっての注意深い自然電位の観察に基づき、活動期における活火山直下の熱水対流の発達過程を初めて明らかにした。

(2) 田口 聡 会員

「北向き惑星間空間磁場の時の地球磁気圏の構造の研究」

地球の磁気圏のダイナミクスは、惑星間空間磁場(IMF)、特にその南北向き成分 B_z と東西成分 B_y に大きくコントロールされている。従来から、強い北向き IMF B_z の状態が継続する場合について、昼間側から polar cap についての研究が行われてきたが、田口会員は、プラズマシートと結合している真夜中付近での IMF B_z コントロールに注目した。磁場観測衛星である Magsat のデータの解析により、強い北向き IMF B_z が継続する時に、従来知られていなかった真夜中付近に3層構造の沿磁力線電流系(MTS, midnight sector triple-sheet) が形成されることを示した。その後、人工衛星 Dynamics Explorer2 の磁場、電場、降下粒子観測のデータの解析により、プラズマ対流と沿磁力線電流系を形成する北向き IMF B_z の時のプラズマシートのダイナミクスのモデルを提出した。このモデルは、最近の Geotail 衛星の遠尾部での磁場及びプラズマの直接観測から得られる描像とよく一致

している。田口会員の仕事は、多くの現象を統一的な基準のもとに調べ、詳細なイベント解析と統計的な解析によって、結果を導いている。さらに、すでにある研究成果をよく勉強して、自分で得た結果と組み合わせることによって、わかりやすいモデルを作り上げている。田口会員は、その後IMP-8の観測の全期間にわたるデータを調べることによって、磁気圏尾部でのサブストームについて、研究の方向を転回して成果を上げている。最近は、Geotailの観測グループに加わり、解析を進めている。

このように、田口会員は、膨大な観測の中から重要な因果関係を見いだして全体像を把握し、それをもとにしっかりした物理を組み上げるというすぐれた業績をあげた。

本年度の大森奨励賞は評議員会の審査を経て以上の2件に授与されました。なお、これらの候補者の選出は大森奨励賞選考作業委員会によってなされたものです。同委員会の津田敏隆委員長はじめ、内野、大志万、乙藤、長井各委員の御努力に感謝致します。

第197回運営委員会報告

日時：1998年11月10日18時半～22時

場所：茨城県青少年会館

出席：河野会長および13運営委員

欠席：高橋委員

主な検討事項・結果：

1. 前回議事録の検討
2か所修整後承認した。
2. シンポジウム共催など承認報告および助成推薦などの報告
以下の4件の共催などを承認した。
 - ・宇宙科学技術連合講演会
 - ・海洋調査技術学会研究成果発表会
 - ・シンポジウム「生きている地球の新しい見方」
 - ・21世紀の地学教育を考える大阪フォーラム又、東レ科学技術研究助成の学会推薦を承認した。
3. 委員会などの報告
以下の4件の報告があった。
 - ・IUGG招致準備委員会より2003年札幌への招致を決定
 - ・地球環境科学関連学会協議会より「地球環境科学基礎講座」の出版計画

- ・学会法人等連絡協議会より文部省による出版助成金の見直し
- ・地球惑星科学関連学会連絡会より1999年度合同学会準備状況

4. 科研費審査委員推薦報告
運営委員会内での投票結果に基づく、候補者の決定経過の報告があった。

5. EPS誌編集委員会報告
編集状況および出版状況について報告があった。

6. 新入会員承認・退会者確認

<新入会員22名>

正会員

近藤 光志	愛媛大学
吉川 一朗	宇宙科学研究所
趙 永浄	名古屋大学
島田 延枝	宇宙科学研究所
渡辺 淳子	東芝
杉田 孝史	環境研究所
Buchert, Stephan	名古屋大学

正会員(学生)

笠谷 貴史	京都大学
-------	------

檀田 佳波	名古屋大学
鴨川 仁	早稲田大学
小川 泰信	名古屋大学
片岡 弘匡	名古屋大学
森瀬 和宏	名古屋大学
杉野 正彦	名古屋大学
原田 誠	千葉大学
竹川 暢之	東京大学
細川 敬祐	京都大学
二穴 喜文	京都大学
竹内 智彦	京都大学
藤田 信幸	京都大学
宮下 幸長	京都大学
小河 勉	東京大学

<退会者14名>

高杉 真司	地熱エンジニアリング
Gaffar, Eddy Z.	Puslitbang Geoteknologi-Lipi
Hermance, John F.	Brown University
Drobjev, Victor I.	National Academy of Science of Kazakhstan
松田 准一	大阪大学
小出 理史	東北大学
(有)アスクシステム	(賛助会員)
竹生 政資	佐賀医科大学
Campbell, Wallace H.	

Huang, Yinn-Nien	MOTC
田尾 一彦	(財)NHK放送研修センター
野田 弘	野田ESI
(株)TRI	(賛助会員)
糟谷 績	東洋大学

7. WPGM2000

日程・運営方針および本会としての対応に関する連絡会宛回答について、報告があった。

8. 地球深部掘削船請願書

請願を受諾し、会長名で総理大臣などにあてて要望書を出すこととした。

9. 総会次第検討

第104回総会次第を検討し、決定した。

10. シニア制度

66才以上を有資格者と想定した経費見積りが報告された。今年度の財政状況を見た上で、来年度以降に導入の可否を決定することとした。

11. 学会連合についてのアンケートへの回答案を検討。

運営委員会内では既にメールによって意見が交換されていたため活発な議論とはならなかったが、河野会長と小野運営委員の間の意見の差異は、両者間で調整することとなった。

12. 第20期役員選挙立候補者の確認を行った。

学会連合について

第104回総会においては、学会連合についてのこれまでの動きについて河野会長から説明がなされ、そのあと当学会としてどのような方針を持ってこの事に当たるべきかについて、かなり時間を使って討論がなされた。

(1) これまでの経過

学術会議の地球物理研連では数年前からIUGGの日本への招致について検討していた。しかし、研連レベルでは議論されているものの、学会のレベルでは強く意識しているとは思えない状態が続いている。これは他の各学会でもほぼ同じようであるらしい。このような状況に危機感を持った河野は、気象学会の松野理事長（当時）、地震学会の石田会長と相談して各学会の会長（理事長）を集めて、「地球物理学関連学会会長等懇談会」をひらくことにした。この会議では、学会連合に対する熱心さの度合い

が、学会ごとにより異なることが明らかになったが、一方IUGG招致という大事業のためには、かなりしっかりした連合組織が必要であることも認識された。このため世話人3人は、第2回の会議を12月中に開催しようと準備をはじめ、その一環として学会連合についての考え方に関するアンケートを作成し、各学会に回答を求めた。勿論このアンケートの回答が、各学会の今後の行動を拘束するものではない、という前提の上である。

注意していただきたいのは、この会議はあくまでも世話人3人の個人的なイニシアチブによって招集されたものだ、ということである。どのような学会連合が望ましいかについては世話人としての考えはあるが、この会議においても、また別の場所でも、これまでにSGEPSS会長として学会としてコミットするような発言をしたことはない。多数の異なった考えの学会の間の話し合いであり、

簡単に合意が得られるとは考えていない。世話人としては、今年中に学会連合に向けた話し合いをはじめの基礎を固めたい。世話人3人はいずれも会長（理事長）の交代期を迎えており、話し合いの基礎を作るところまでが自分達の任務であり、実際にどのような連合組織を目指すかは、次期の学会リーダー（会長、運営委員）に中心となって考えてもらいたいと思っている。

実際にこのような作業のためのワーキンググループができるのは来年以降のことであろう。SGEPSSとして、学会連合の個々の問題にどのような立場をとるかは、他の学会との折衝と平行して学会内で議論を進めていく必要がある。

以上のように学会連合についての当学会の意思はまだ決定されておらず、アンケートの回答も学会を縛るようなものではない。しかし全会員に対する周知が図られないうちに、取り返しのつかない決定が下されているのではないか、という心配をおかけしたことは、会長と運営委員会の努力が足りなかったと反省している。この点についてはおわびしたい。

(2) 質疑および討論の概略

- アンケートには学会の運命を託すような質問も含まれている。運営委員と評議員だけでなく、全会員に伝えて意見を聞くべきだ。
- アンケートは普段コミュニケーションがない多くの学会代表を集めて、短い時間内に有意義な会議を持つための、問題設定のテクニックであると考えてもらいたい。今後の学会の立場を拘束するものでないことは前文にも明記しており、学会の運命を託すようなものではない。
- 学会連合が必要であることは明らかであるが、誰かが動かなければ始まらない。全体の流れを作るきっかけになるので会長の行動は適切だと思う。
- こういう問題ではどこかの学会が頑張らないと進まない。SGEPSSは以前から学会連合に関してイニシアチブをとってきており、今度の問題でもその立場をとるべきだ。
- IUGGはたしかに大問題だが、その対応だけを考えるなら *ad hoc* な学会連合が良い。
- 連合大会を開催した経験からいうと、臨時的な組織では共通意思の形成が困難であり、どうしても財政的基盤を持った組織が必要だと個人的には考えている。
- ホームページに載っていたというが、ほとんどの会員には伝わっていない。大事な情報が会員に伝

わらないのは、学会の運営の仕方がおかしい。

- 今回のことについては、学術会議の研連と各学会との間のカップリングが悪かったと反省している。
- 「学会連合」という言葉は強すぎると思う。そのような包括的なものでなく、臨時的にやるしかないのではないか。
- 大会を催すのはLOCなど研究者が中心になった組織であろう。その研究者たちが犠牲になってはいけない。そのためにバックアップする組織が必要であることを明確にすればよい。
- 地球物理研連としては、IUGG招致は決めたが、学会連合などの受け皿組織について議論はしていない。各学会は応分の助力をするといっており、そのためにどんな組織が必要かは、学会側で考えることだという認識である。
- Space plasma physics は地球物理学の中だろうか。学会連合がどれだけ我々の役に立つか。
- SGEPSSはこれまで恵まれた環境にあって力を発揮してきたが、そういう状況はいつまでもは続かない。地球物理全体としての発言力を増すためには、やはりAGU型の財布の一つである学会を目指すべきである。
- 合同学会が3年を目処として始まったが、成功して今も続いており、連合を進める期は熟している。
- 学会連合はこれから先ますます重要性が増す。そのときに最も大事なものは、我々の identity をどのように考えるかである。

E P S 運営委員会報告

小野 高幸 運営委員

EPS誌は現在No.9まで出版作業が進められており、これまで219論文が投稿されている。未だ油断はできないが、順調に立ち上がっていると判断される。

EPS誌の持つ特色の一つとして検討されてきたNews Letterは、タイトルを「Research News」として10月号から掲載されることとなった。

購読数を拡大する工夫の一環として、Home Pageによるタイトル、著者、アブストラクトの公開、並びに海外の潜在的な購読者30名程度に対して、1年間のEPS誌寄贈などの試みがテラパブより提案されており、検討中である。

大林奨励賞を受賞して

第6号「自然電位観測による雲仙普賢岳直下の熱水対流の発達過程の解明」

京都大学理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センター 橋本 武志

このたびは伝統あるSGEPSSより大林奨励賞をいただき大変光栄に存じます。これまで御指導いただいた方々、推薦して下さった方々、その他関係者の皆様に心より感謝いたします。

私は京都大学理学部地球物理学教室で地球電磁気学の研究を始めました。学部4回生の当初は現在の専門とは異なり、荒木徹先生、寺沢敏夫先生（当時京都大学助教授）の御指導の下、あけぼの衛星によって観測された粒子データを使わせていただきカサブ領域の構造を調べていました。学会のことや研究の進め方など右も左もわからない



当時の私にとって、巨大プロジェクトに支えられた研究領域全体の中で自分の手がけたデータ解析の位置づけを理解するのは難しいことでした。けれども、日々のセミナーなど京都での研究生生活を通じて地球電磁気学の重要な研究分野のひとつとなっている超高層物理学の基礎的な部分を勉強する機会を得たことは私にとって貴重な経験となりました。

その後、修士課程に進学した1991年に、雲仙普賢岳の198年ぶりの噴火に遭遇したことで私の研究テーマが大幅に変わることになりました。以前からフィールド・ワークには興味を感じていたのですが、今から思えば、学部3回生時に地球電磁気学講座の野外実習で阿蘇の火山研究所（現地球熱学研究施設火山研究センター）に御世話になる機会があり、田中良和先生の指導で阿蘇火山の地磁気全磁力観測を経験したこともこの世界に足を踏み入れる大きなきっかけとなっています。雲仙普賢岳の噴火は予想外に長期化したため、結局博士課程終了時まで観測を続けることになりました。普賢岳では大地に生じる電位（自然電位）を観測して地下の流体流動を調べようとしていたのですが、活動中の火山を研究対象としたことで他にはないダイナミックな変化をとらえることができました。その反面、危険を伴うこともあり、当初は田中先生には常に同行していただかなければならぬ大変な御面倒をおかけしたと思います。また、先生には観測の実際から測定器の製作まで懇切丁寧に指導していただいたことで、これまでまったく知らなかった視点でものをみ

ることができるようになりました。火山というフィールドには他にはない独特の過酷さもあり辛い経験もりましたが、これまで続けてこられたのは Conductivity Anomaly 研究グループ(CA研究グループ)の皆様をはじめ多くの方々が折にあれば叱咤激励して下さったからだだと思います。特に、私がその後、拡充発展させていく基盤となった普賢岳の自然電位の測定システムを噴火当初に立ち上げて下さった東京大学の歌田久司先生と鍵山恒臣先生には終始励ましの御言葉を頂いたことを思い出します。普賢岳の噴火は、私がこの研究テーマを博士論文にまとめようとしていた時期に終息しましたので、私は噴火の初期段階から終息までの一部始終を観測者の立場として見届けることができたわけです。これもまた私にとっては幸運なことだったと言わざるを得ません。

博士課程終了後は地球熱学研究施設（京都大学）に助手として職を得ることができ、現在は阿蘇の豊かな自然環境と周囲の方々のあたたかい御指導の下で研究活動にいそしんでおります。九州地方は活火山の宝庫ですから、大いなる仮説を持って観測に挑むべき対象には事欠きません。荒木先生は私を阿蘇に送り出すにあたって「グローバルな視野でローカルな仕事を」という言葉を下さりましたが、今後ともこの言葉を忘れず、興味の対象を広く持つとともに、微力ながらSGEPSSの発展にも貢献したいと決意を新たにしております。よろしく御指導の程お願い申し上げます。

大林奨励賞を受賞して

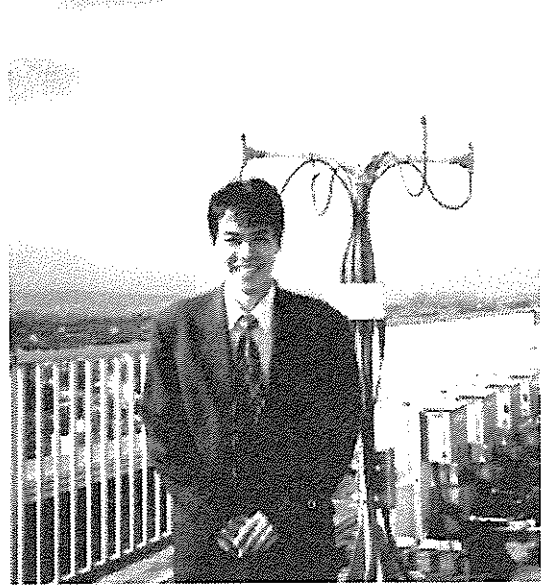
第7号「北向き惑星間空間磁場の時の地球磁気圏の構造の研究」

電気通信大学電気通信学部電子工学科 田口 聡

このたびは大林奨励賞をいただき、まことにありがとうございます。大学に入って間もないころ、大林辰蔵先生の名著「宇宙空間物理学」（当時もすでに絶版）を、京都の百万遍の古本屋でたまたま見つけました。「地球周辺の宇宙空間の現象はこんなにきれいに説明できるんか、これはおもしろそうやな」と感じたことがこの分野を勉強するきっかけとなったことを思い出します。その本に書かれているようなことから、スペースサイエンスの分野は大きく展開し、新しい人工衛星があがるごとに理解を修正しつつ進展してきたようです。今回の受賞の研究である「北向き惑星間空間磁場の時の磁気圏の構造の研究」も人工衛星データ解析に基づいたものであり、この分野の学問の進展のひとつとして評価して頂き、嬉しく思います。

この研究テーマは、大学院の研究テーマとして、ダイナミクス・エクスプローラー衛星データに基づく昼側カスプ領域付近の沿磁力線電流構造の解明を杉浦正久先生から頂いたことに発端があります。当時、NASAゴダード宇宙飛行センターの上記の衛星データを京大理学部と地磁気解析センターに移す時期であり、我々学生は、ホットなデータで勉強をさせてもらえると同時に、ハード・ソフト面の解析システムが一から構築される状況の中に置かれていました。京都の地磁気解析センターは、荒木徹先生を始めとするスタッフの方々によってすでに素晴らしいコンピュータ環境が用意されている組織ではありませんでしたが、当時は、今のように大容量コンピュータ記憶媒体が安価に手にはいり、また、インターネット環境が完備されている時代ではありませんから、データの移管、システムの確立にはご苦労があったことと思います。そのような状況でも、当時の我々学生にプロジェクトのプレッシャーを感じさせることなく、じっくり考え自由に研究ができる雰囲気を作って頂いていたことに感謝しております。

この雰囲気のもと、上記の衛星の解析から少し離れて、マゲサット衛星の磁場データにより沿磁力線電流構造を調べてみました。結果として、これによりある電流系に目をつけ、論文としてまとめることができました。この結果を足掛りとして、ダイナミクス・エクスプローラー衛星の磁場・電場・プラズマなどの解析へと発展させることができ、ま



た、この研究が縁でアメリカのNASAゴダード宇宙飛行センターにて研究する機会も得られました。その期間においては、奥澤隆志先生の深いご理解もあり、じっくり研究することができ、今回の受賞の研究テーマをさらに発展させることもできました。

現在、電離圏プラズマ対流モデルの構築、Geotail衛星による磁気圏の構造およびダイナミクス、また、両者をうまく結合させることによる電離圏・磁気圏のモデル化について研究を進めつつあります。日本のスペースサイエンスのコミュニティは、比較的コンパクトで、電離圏と磁気圏領域のみならず、熱圏から太陽系の惑星間空間に及ぶ領域の研究者の密なインターアクションをもてる良さがあるように思います。実際、アメリカ滞在中に、その十分なマンパワーによる研究推進の力強さを感じた反面、領域間の研究者のインターアクションの不足を感じたこともあります。今後、日本のコミュニティは、太陽地球間を一つのシステムとして理解したり、また、地球および他惑星の宇宙空間の電磁気を包括的に捕らえる研究において、さらにうまく先導的役割を果たせるのではないかと感じています。この方向性で、学問の進展に貢献できるように精進する所存です。今後とも学会の皆様よろしくお願い致します。

太田 柁次郎 名誉会員の逝去を悼む

福島 直 名誉会員



在りし日の太田柁次郎名誉会員

太田柁次郎名誉会員（京都大学名誉教授）は平成10年10月18日に90才で逝去されました。第二回国際極年（1932-33）の時に京都大学の長谷川研究室に入られた太田先生は、阿蘇における地磁気観測結果を解析して、有名な Hasegawa-Ota 論文に発表された輝かしい研究成果（Sq電流渦中心位置の逐日変動）を挙げられました。

本学会の前身である「日本地球電気磁気学会」が設立された頃の事情については、太田先生ご自身が『本学会創立当初の思い出』と題して会報第138号（1993.1.20）に詳しく述べておられます。1947-60年の間は、京都大学理学部地球物理学教室内で太田先生が献身的に学会事務を担当しておられました。1961年からは学会運営が新方式で行われ、第一期役員選挙で評議員と運営委員の両方に当選された太田先生は、強い責任感を発揮されて運営委員の方を選ばれましたことは深く私の記憶に残っています。

国際地球観測年（IGY, 1957-58）に際しては、日本が南極地域観測事業に着手してからはIGY事業に関する内外連絡実務を太田先生と私が担当しました。1957年2月末から3月始めにかけてIGY西太平洋地域会議を開催する苦勞を共にしたことなどが懐かしく思い出されます。

世界各地の地磁気観測結果を利用解析して多くの研究成果を挙げてきた日本の実績がひろく認められて、地磁気世界資料センターが京都大学に設置された時、太田先生は前田坦教授とともにこのセンターの発展に努力されました。世界磁気測量が1964-65年に実施された直後には太田先生が編集を担当して同センターから日本国内及び周辺の地磁気測量結果を總めた立派な報告書が刊行されています。

1961年9月にInternational Conference on Cosmic Rays and the Earth Storm^が、また1973年9月にIAGA Second General Scientific Assembly^が何れも京都で開催された時には、太田先生は地元委員会の一員として会議出席者一同への奉仕役に徹しておられました。

私たちの学会でも研究組織でも、一方ならず太田先生のお世話になりましたことを思い起こし、ここに感謝の意を表しながら故人のご冥福を祈ります。

平成10年度大林奨励賞の 候補者推薦のお願い

大林奨励賞候補者推薦作業委員会

平成10年度大林奨励賞につきまして、下記により会員からの候補者推薦をお願いいたします。

記

1. 候補者の対象：下記の大林奨励賞内規第1条に該当する本学会若手会員（原則として平成10年4月1日現在で35才以下とする）

＜大林奨励賞内規第1条＞

本学会に大林奨励賞を設け、以下(1)(2)項に相当する会員を表彰し、その研究を奨励する。

- (1) 本学会若手会員の中、地球電磁気学、超高層物理学、及び地球惑星圏科学において、独創的な成果を出し、さらに将来における発展が充分期待できる研究を推進している者。
 - (2) この場合、若手会員とは当該年度初めに、原則として35才以下の会員をいう。
2. 推薦者：本学会会員（及び大林奨励賞候補者推薦作業委員会委員）
 3. 推薦締切期日：平成11年3月1日(月)必着
 4. 推薦手続き：以下の(1)から(8)の項目を記載した推薦書を1部送付(郵送)してください。
 - (1) 推薦者氏名（自署・印）
 - (2) 候補者氏名、生年月日
 - (3) 候補者所属機関・部局・職
 - (4) 学位論文名
 - (5) 学位取得年
 - (6) 審査対象論文名（3編以内、コピー各1部添付）
 - (7) 審査対象論文に対する評価（それぞれの論文について400字以内）
 - (8) 候補者の研究が学会、研究分野に果たす貢献、及び候補者の研究の将来性（400字以内）
 5. 推薦書送付先：〒611-0011 宇治市五ヶ庄
京都大学超高層電波研究センター 津田 敏隆
e-mail tsuda@kurasc.kyoto-u.ac.jp
TEL：0774-38-3804（直通） FAX：0774-31-8463
 6. 大林奨励賞推薦作業委員会委員名簿
津田敏隆(委員長) tsuda@kurasc.kyoto-u.ac.jp
内野 修 ouchino@hq.kishou.go.jp
大志万 直人 g53032@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp
乙藤 洋一郎 otofuji@icluna.kobe-u.ac.jp
前沢 冽 maezawa@phys.nagoya-u.ac.jp
長井 嗣信 nagai@geo.titech.ac.jp

人事公募

●東京大学大学院理学系研究科地球惑星物理学専攻

公募人員：固体地球物理学大講座 教授 1名

研究分野：固体地球物理学（地球ダイナミクス、地球内部物理学、地震物理学）

着任時期：平成11年6月1日以降の出来るだけ早い時期
提出書類：

- 1) 略歴書（学歴及び職歴）
- 2) 業績目録（査読論文とそれ以外の総説等に分けて下さい）
- 3) 主要論文別刷（コピー可）5編以内
- 4) 研究業績の概要（A4用紙1枚に要約）
- 5) 今後の研究計画及び抱負（A4用紙1枚に要約）
- 6) ご本人が応募される場合は所見を伺える方（2名）の氏名及び連絡先

適任者をご推薦頂ける場合は推薦状

応募・推薦締切：平成11年2月12（金）必着

書類提出先：〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院理学系研究科

地球惑星物理学専攻事務室

*封筒に「教官応募書類在中」と朱書きし、郵便の場合は書留でお願いします

問い合わせ先：

固体地球物理学大講座 教授 松浦 充宏

TEL: 03-3812-2111 内線4318 FAX: 03-3818-3247

E-mail: matsuur@geoph.s.u-tokyo.ac.jp

●名古屋大学太陽地球環境研究所

公募人員：教授または助教授 1名

所属部門：総合解析部門

公募分野：太陽-地球システムの構造/変動の研究

上記部門においては、太陽地球系の総合研究、とくに領域間の相互作用の研究が行われています。今回の公募では、人工衛星/地上観測データの総合解析とシミュレーション/モデリングをつなぐ研究の発展に指導的役割を果たして頂くとともに、幅広く太陽地球系科学の教育にも当たって頂ける方を希望します。

全国共同利用研究所としての当研究所の任務を十分理解し、当研究所の研究にリーダーシップを発揮する方を希望します。

着任時期：平成11年4月1日以降のできるだけ早い時期
提出書類：履歴書、研究歴、業績リスト、主要論文別刷、研究計画書〔応募する職種（教授、助教授の別）を明記のこと〕；自薦の場合は本人について意見が述べられる方2人の氏名と連絡先、他薦の場合は2名からの推薦書。封書に「教官応募書類在中」と朱書き、書留で送付のこと。

公募締切：平成11年1月20日（水）

選考：名古屋大学太陽地球環境研究所人事選考委員会の選考に基づき、同運営協議会の意見を求めて同教授会で決定します。なお、該当者がいない場合は決定を保留します。

宛先：〒442-8507 愛知県豊川市穂ノ原3-13
名古屋大学太陽地球環境研究所 所長 國分 征
電話：0533-89-5182 FAX：0533-84-8806

問合せ先：〒442-8507 愛知県豊川市穂ノ原3-13
名古屋大学太陽地球環境研究所 総合解析部門主任 上出 洋介
電話：0533-89-5183 FAX：0533-89-0409

●北海道大学理学系研究科付屬地震火山観測研究センター

職種・員数：助教教授4名(定員の制約により内2名以上は内部)

分野：地震観測、海底地震、火山活動、地下構造
各1名(複数応募可)

着任時期：決定後できるだけ早い時期

応募書類：

- 1.履歴書
- 2.今までの研究についての概要(2000字以内)
- 3.研究業績目録(原著論文・著書・総説・報告などに分ける)
- 4.主な原著論文別刷り5篇
- 5.研究と教育の計画と抱負(2000字以内)
- 6.観測経歴とその概要
- 7.科研費などの採択状況、プロジェクトなどへの参加状況と成果発表
- 8.学位論文審査件数

メ切：1999年1月5日(火) 書留にて郵送のこと

送付先・問い合わせ先：

060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
地震火山観測研究センター 島村 英紀
Tel: 011-706-3528 Fax: 011-746-7404
E-mail: shima@lobs.sci.hokudai.ac.jp

共同利用研究公募

●平成11年度宇宙環境利用に関する地上研究公募

広範な分野の研究を宇宙環境を利用する実験に結びつけ、更には具体的な宇宙実験の提案・実施に至るまでの、地上における関連研究(宇宙科学、地球科学等)

フェーズ1研究：

宇宙環境利用の研究の有効性や手法、実験手段などについて理論研究、調査検討、地上実験を行なう。

- A：3000万円以下/年
- B：600万円以下/年
- C：150万円以下/年

フェーズ2研究：

意義および有効性が認められ、実験概念が明確に定義されたテーマについて、JEM利用募集への応募を目標に実験の計画作成および実験装置の仕様設定を伴う、準備段階にある研究が対象。経費は年間1000万円程度から1億円まで。

形態：委託研究(大学、企業)、共同研究(国立研究所)、招聘研究

期間：1-3年

メ切：平成11年1月29日(当日消印有効)

研究開始：平成11年7月

問い合わせ先：

(財)日本宇宙フォーラム 公募研究推進部 募集担当
Tel: 03-3459-1653 Fax: 03-5470-8426
E-mail: koubo@jsforum.or.jp
Home Page: <http://www.homepage.co.jp/jsforum>

次期月探査シンポジウム 「セレーネ2号機をめざして」 開催のご案内

今年度からSELENE（月探査周回衛星）計画が開発研究と認められ、現在システム予備設計を実施しておりますが、SELENE以降どの様な月研究・利用ミッションを行うべきなのか、そろそろ具体的な検討を開始すべき時期が来ていると思われるため2006年頃、H-2Aを用いた打ち上げを想定した次期月ミッションに関して、様々な観点から自由に討議する場が必要であると考え、上記シンポジウムの開催を計画しております。多数の方々の講演発表と参加をお願い申し上げます。

【主催】 宇宙科学研究所, 国立天文台, 宇宙開発事業団

【開催日】 平成11年3月23日（火）, 24日（水）

【会場】 国立天文台解析研究棟大会議室（三鷹市）

【呼掛人】

鶴田浩一郎（宇宙科学研究所教授）
水谷 仁（宇宙科学研究所教授）
海部宣男（国立天文台ハワイ観測所長）
唐牛 宏（国立天文台教授）
観山正見（国立天文台企画調整主幹）
三浦秀一（宇宙開発事業団理事）
長島隆一（宇宙開発事業団
先端ミッション研究センター長）

【連絡先】

●宇宙科学研究所

飯島祐一 (iijima@selene.sci.isas.ac.jp)
Phone: 0429 (59) 8184 Fax: 0429 (59) 8457

●国立天文台水沢

花田英夫 (hanada@miz.nao.ac.jp)
Phone: 0197 (22) 7142 Fax: 0197 (22) 7146

●宇宙開発事業団先端ミッション研究センター

横山隆明 (Yokoyama.Takaaki@nasda.go.jp)
Phone: 0298 (52) 2251 Fax: 0298 (52) 2247

【講演内容（案）】

一般講演としては以下の3セッションを予定しております。

S1 / 月の科学(月の内部構造、ペネトレーター、地質・鉱物探査、等)

S2 / 月からの科学(小型実験望遠鏡、将来の月面天文台、等)

S3 / 月探査技術(夜間サバイバル技術、月面ローバー、掘削技術、等)

【日程（案）】

3月23日（火）

9:30開演 基調講演: これまでの日本の月探査計画と将来展望(予定)

一般講演

18:00～ 懇親会

3月24日（水）

9:30～15:00 一般講演

15:00～17:00 ディスカッション(ワーキンググループの設立について。)

【講演の募集】

上記のセッションで講演を多数募集いたします。一講演あたり15～20分を予定しております。

【講演/参加の申込方法】

今回のシンポジウムでは、シンポジウムホームページにて申し込みを受け付けております。

<ホームページアドレス>

<http://hope.tksa.nasda.go.jp/selene-2/>

[申し込み手続き]をクリックし、書式に従ってお申し込み下さい。

またe-mail, Fax, 郵送にても申し込みを受け付けております。下記の書式に従いお申し込み下さい。

1. 氏名及び所属
2. 通信先(郵便番号, 住所, 氏名, 電話番号, Fax, e-mail)
3. 講演の有無(講演の場合希望セッション)
4. 使用器具(OHP, ビデオ(VHS), その他)
5. 講演題目
6. 講演概要(数行程度)

【申し込み締切】 平成11年1月31日

【申込先】

〒105-0013 東京都港区浜松町1-29-6

浜松セントラルビル8階 日本宇宙フォーラム
次期月探査シンポジウム事務局 宛

Phone: 03 (3459) 1652 Fax: 03 (5402) 7521

e-mail: selene-2@moon.nasda.go.jp

SGEPSS Calendar

1998年		
12月6日-10日	AGU Fall Meeting	in San Francisco
1999年		
1月13日	南極観測将来問題に関する研究会	於 国立極地研究所
1月15日	Deadline for submission of abstracts for IUGG99 /URSI XXVI	
1月21日-23日	宇宙天気シンポジウム	名大STE研, 郵政省通総研共催
5月17日-21日	1999年環境電磁工学国際シンポジウム (本会協賛)	於 中央大学駿河台記念館 各種の電磁環境問題と関連技術を中心に発表・討論. 参加費4万円
5月31日-6月4日	AGU Spring Meeting	in Boston, Massachusetts
6月8日-11日	地球惑星科学関連学会1999年合同大会	於国立オリンピック記念青少年総合センター
7月18日-30日	IUGG99 XXII General Assembly of the International Union of Geodesy and Geophysics	in Birmingham, UK
8月13日-21日	URSI XXXVIth General Assembly	

SGEPSSカレンダーは会員からのお知らせで成り立っております。国内外の学会、研究会、委員会、予稿締切等、皆様に広めるべきことがございましたら会報担当までお知らせください。

地球電磁気・地球惑星圏学会

会長 河野 長

〒113 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学 理学部 地球惑星物理学科

TEL:03-3812-2111,ex.4310 FAX:03-3818-3247 e-mail: kono@geoph.s.u-tokyo.ac.jp

総務 岩上 直幹

〒113 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学 理学系研究科 地球惑星物理専攻 (1号館)

TEL:03-3812-2111,ex.4590 FAX:03-3818-0745 e-mail: iwagami@sunep.grf.s.u-tokyo.ac.jp

庶務 渡邊 堯 (会報担当)

〒310 茨城県水戸市文京 2-1-1 茨城大学 理学部 地球生命環境科学科

TEL:029-228-8399 FAX:029-228-8405 e-mail:watanabe@env.sci.ibaraki.ac.jp

運営委員会 〒113東京都文京区本駒込5丁目16番9号学会センターC21 (財)日本学会事務センター気付

03-5814-5810 会員業務 (入退会、住所変更等、会費、会誌)

03-5814-5801 学会業務 (庶務、窓口、渉外)

03-5814-5820 ファクシミリ

入会申し込みは運営委員会宛、研究助成金案内は総務宛、会報への投稿は担当庶務宛ご連絡ください。
会報へのご提案、ご意見、情報提供、寄稿をお待ちしています。